



神戸大学附属図書館報

神戸大学附属図書館

(Issue Date)

2004-01-01

(Resource Type)

other

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100475593>



神戸大学附属図書館報

The Kobe University Library Bulletin Vol.13 No.4

冬季号

January 2004



目 次

ドイツ大学図書館のフェルンライエのこと (副館長 山本 道雄) p 2
自著を語る p 4
須崎 慎一(国際文化学部教授)	
平山 洋介(発達科学部教授)	
神戸大学教官著作一覧(平成15年度前期受入分) p 5
フランス大学図書館訪問記 p 6
国立国会図書館関西館見学記 p12
図書館からのお知らせ p13
文献検索システムWeb of Science導入	
国際教養系図書室に最新刊の一般教育用図書を大幅拡充	
人文・社会科学系図書館、医学部分館に図書自動貸出返却装置設置	

ドイツ大学図書館のフェルンライエのこと

山本道雄

私の専門はカント哲学を中心にした18世紀ドイツの啓蒙思想研究である。したがって当時の一次文献が手許になければ研究はにっちもさっちも行かない。最近では相互貸借の制度のおかげで（掛員の方に調べて頂いたところこの制度はすでに昭和59年頃からあったとのこと）、国内の図書館で間に合わせるができるようになりつつある。しかしこの制度が充実する以前は、稀少な一次文献はもちろん、それ以外の古い文献ももっぱらドイツの大学図書館を頼りにするほかなかった。そのさい先方の大学図書館の対応はとつ国の研究者を感激させるに十分なものがあつた。ドイツ以外の図書館事情についてはよく通じていないが、同僚から仕入れた情報から推しても、この国の大学図書館のサービスぶりは群を抜いていたように思う。

先方の大学図書館に手紙で問い合わせると、その対応には三つのパターンがあつた。その大学図書館に希望の書籍が所蔵されている場合は、当方の希望に応じ、複写あるいはマイクロフィッシュで、送ってくれるというケース。大学によって異なるが、その期間は早いときでほぼ1ヶ月、遅くとも2ヶ月でものが届いた。次にその大学にない場合は、然るべき他の大学を探しだしてくれたうえで、そこに連絡するようにとの返事が戻ってくるケース。最後に、先方の判断で他の大学図書館に連絡し、その大学から当方に連絡が入ることもある。論文の複写のようにかさばらない文献の場合、送料を含めて一切無料ということもあつた。昨年だったか、ある書籍の複写をブレーメン大学に依頼したところ、その現物をフェルンライエ（遠隔地貸出制度）で送ってくれ、しかも相当の頁数の書籍だったのだが、費用は一切無料。遠隔地には日本は入っていないはずであるが、いまもってよく事情が呑み込めないままだ。

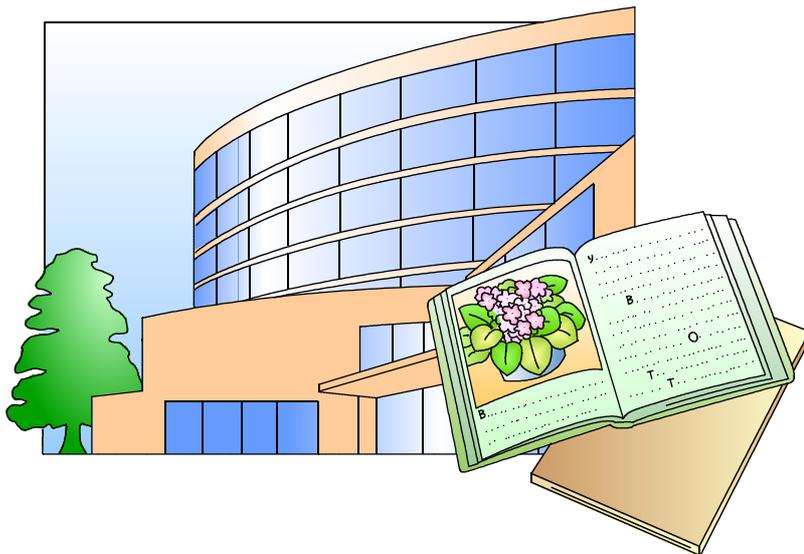
このようなやりとりのなかで、ときに小さなヒットを放つこともある。ある18世紀の思想家のラテン語論文を訳そうとして、その当時のドイツ語訳を探していたときの話である。稀覯本であり、噂ではその方面を専門とするドイツの研究者も手にしていないとのことだった。もちろん複製版もない。駄目でもともとの気持ちで、いつものようにゲッティンゲン大学図書館から探りを入れた。予想通り当大学には所蔵せず、他大学にも心当たりなしとの返事。次に他の二、三の大学を適当に選んで問い合わせたところ、同じような返事。このようなやりとりを1年近く繰り返し、あきらめかけていた矢先に、突然、思いもかけずポッフム大学から、当館にありとの返事が舞い込んだ。ポッフム大学はドイツでは新しい大学であり、この図書館が古い文献を所蔵しているはずはないと、はじめから問い合わせていなかった。本人以外には実に他愛もない話であるが、当時の私にはまさにピンゴー！の心境であつた。ともあれこれでようやく本邦初訳のそれなりの仕事をする事ができた。

いまひとつは当時の東ドイツの図書館の絡む一件である。探していたのは一八世紀前半の書籍であるが、それが世界でただ一冊、当時の東ドイツのイエーナ大学（フリードリヒ・シラー大学）に所蔵されていることだけある筋から調べだしていた。ともかくやってみようと連絡を取ったところ、案の定なしのつづて。一年以上たつて忘れかけた頃、いささか疲れ気味の封筒とともにはるはるば

るイエーナから返事が届き、然々の金額を払い込めとの連絡。それからまた半年以上待たされたであろうか。ようやく件の書籍のマイクロフィッシュが届いた。いま現物は人文系図書館に納められているはずだ。

昔話で終わるのも心苦しいので、最近の事情を少しご紹介しておきたい。といってもかつて私が留学（一九九二～九三年）していたトリア大学図書館のことであるが。トリアはドイツ南西部にあるドイツ最古の小都市であり（K.マルクスの故郷）、大学の規模としてはドイツでは中規模あるいはそれよりやや小さな規模の大学である。他大学の事情は知らないが、当時そこではヘルンライエの費用が教官・学生一律1マルクだった（あるいは2マルク。当時の為替相場で1マルクはほぼ80円。郵送料別）。先日、最近の事情を友人に問い合わせたところ、現在では一律1ないしは2ユーロとのことだった。ちなみにいまでは書籍の貸出・返却はすべて、「学生証兼図書カード（兼銀行のカード）」で管理されている。開館時間は、平日は午前8時～午後9時、土曜日は午前8時～午後5時、日曜日は午前11時～午後2時まで。余談ながら私が留学していた頃、閉館時間ぎりぎりまで粘って研究しているのは、いつも髪の毛の黒い学生ばかりということでも有名だったが、しかし彼らはみな韓国からの留学生だった。そもそも日本からの留学生はきわめて少数だった。現在では留学生もさらに増え、そのかなりの部分を中国からの学生が占めているとのこと。留学生の増加は、トリア市の財政事情から学生の落とすお金が欲しいというのがその理由らしい。

ところでわが国における相互貸借制度であるが、最近の充実ぶりには目を見張るものがある。とくに NACSIS でオンライン検索ができるようになってから（これも調べて頂いたところ平成4年からということ）、研究環境は飛躍的に向上した。以前であれば、図書館に希望の書籍がない場合は、多くはそこで研究は行き詰まりになったものだ。いまはそういうことはまずない。古い稀少な一次文献はともかく、二次文献であれば、たいいていのものを国内の大学図書館から手に入れることができる。有り難いことである。 （やまもと みちお 副館長・人文科学系担当）



『二・二六事件 青年将校の意識と心理』須崎愼一著

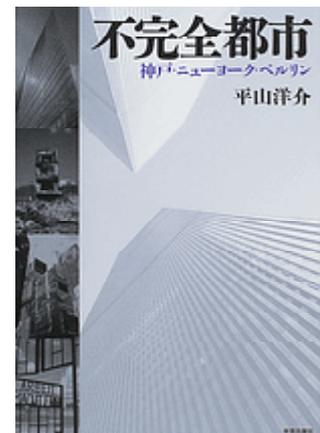
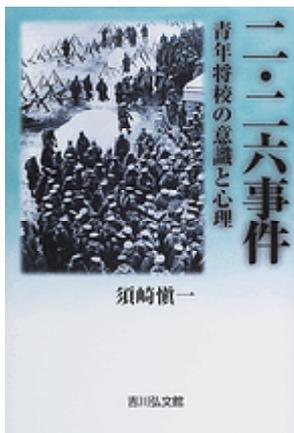
(吉川弘文館 2003.10)

本書は、通念的な二・二六事件像を批判し、事件自体を再構成した書である。東京地検記録課で限定公開されている「二・二六事件裁判記録」に含まれる青年将校をはじめとする事件関係者の陳述・手記によれば、二・二六事件とは、陸軍の「統制派」・皇道派の派閥対立の中で、北一輝の影響を受けた青年将校が、農村の窮乏を憤って起こした事件などでは決してない。青年将校たちは、「上長を推進して維新へ」・「上下一貫、左右一体」をスローガンに合法的運動をめざしていた。テロ・クーデタばかりを考えていた訳ではないのである。また「統制派」と

いう用語自体も、陳述で使用しているのは、私が確認した範囲では実業家の石原広一郎にとどまる。「統制派」と皇道派の対立という図式自体、秦郁彦氏が『軍ファシズム運動史』で、回想などに基づき「便宜的」と断って記述したものであったという(林美和「派閥対立史観の形成とその虚構」[『鶴山論叢』第4号 2004年3月刊行予定 参照])。自明とされてきた「統制派」・皇道派の対立も、史料的にきちんと裏づけられた概念では必ずしもないのである。詳しくは本書に譲るが、我々は教科書・映像などを通して流布された通念的理解にミスリードされていたのではなからうか。

(すぎき しんいち 国際文化学部教授)

所蔵：国際系図 210-7-S



『不完全都市 - 神戸・ニューヨーク・ベルリン -』平山洋介著

(学芸出版社、2003.8)

特定の都市像を突出させ、一元的な価値で空間を埋め立てるのではなく、複数の欲求が呼応して摩擦し合う状態こそを維持すべき、という考え方を、震災に見舞われた神戸、グローバル経済とテロによって変成したニューヨーク、イデオロギーが引き裂いたベルリン、という3都市の「破壊/再建」を素材として書いた。神戸の復興仕事をしていると「珍しい経験をしているなあ」と感じた。しかし、あちこちを歩き回っていると、壊れた空間に頻繁に出くわし、「破壊/再建」は「とくに珍しいとはいえないなあ」

と思った。体力勝負には自信があるので、フィールドを歩き、調査を繰り返し、膨大な資料を読んだ。立論を直接的に示すのではなく、3都市の特異経験についての具体分析を重ねるところから浮かび上がらせた。多数の欲求が交錯する都市は完全ではありえない。純粋な空間を追求する行為はしばしば暴力的である。アーヴィングやクンデラを読んでいると、登場人物が不完全な人間ばかりであることに気付く。彼らの小説は常に哀しく、しかし可笑しく、素敵である。人間が有限で不完全であるのに似て、人間が建築する空間には葛藤と感いがつきまとう。その大切さを書きたかった。

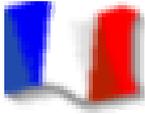
(ひらやま ようすけ 発達科学部教授)

所蔵：人間系図 518-8-H

神戸大学教官著作一覧（平成15年度前期受入分）

平成15年度前期（4月～9月）に図書館に受入した本学教官著作を紹介します。紹介著作は2003年1月以降に出版された、単独著、共著、編著の図書といたしました。

部局名	著者	書名等	受入図書館
国際文化学部	坂本千代著	ジョルジュ・サンドの世界（第三書房 2003.6）	国際・教養系図書室
	坂井一成編	ヨーロッパ統合の国際関係論（芦書房 2003.4）	国際・教養系図書室
	山内乾史ほか編	比較教育社会学入門（学文社 2003.2）	国際・教養系図書室
	須崎慎一著	二・二六事件：青年将校の意識と心理（吉川弘文館 2003.10）	国際・教養系図書室
発達科学部	白倉暉弘ほか著	やさしいグラフ論 改訂版（現代数学社 2003.4）	人間科学系図書室
	二宮厚美著	構造改革と保育のゆくえ（青木書店 2003.3）	人文・社会科学系図書室
	平山洋介著	不完全都市：神戸・ニューヨーク・ベルリン（学芸出版社 2003.8）	人間科学系図書室
法学研究科	阿部泰隆著	内部告発（ホイットブルウワー）の法的設計（信山社出版 2003.5）	人文・社会科学系図書室
	阿部泰隆著	行政訴訟要件論（弘文堂 2003.7）	人文・社会科学系図書室
	大内伸哉著	イタリアの労働と法（日本労働研究機構 2003.2）	人文・社会科学系図書室
	岸田雅雄著	商法・商法施行規則の重点詳解（中央経済社 2003.6）	人文・社会科学系図書室
	吉川元編	国際関係論を超えて：トランスナショナル関係論の新次元（山川出版社 2003.6）	人文・社会科学系図書室
	小室程夫著	ゼミナール国際経済法入門（日本経済新聞社 2003.7）	人文・社会科学系図書室
	近藤光男編	現代商法入門（有斐閣 2003.3）	人文・社会科学系図書室
	近藤光男ほか著	証券取引法入門 新訂第2版（商事法務 2003.4）	人文・社会科学系図書室
	三井誠編	刑事法辞典（信山社 2003.3）	人文・社会科学系図書室
	三井誠編	入門刑事法（有斐閣 2003.5）	人文・社会科学系図書室
	三井誠著	刑事手続法 2（有斐閣 2003.7）	人文・社会科学系図書室
	山下淳著	行政法（有斐閣 2003.5）	人文・社会科学系図書室
経済学研究科	石黒馨編	ラテンアメリカ経済学（世界思想社 2003.4）	人文・社会科学系図書室
	久保広正著	欧州統合論（勤草書房 2003.4）	人文・社会科学系図書室
	新庄浩二編	産業組織論（有斐閣 2003.4）	人文・社会科学系図書室
	滝川好夫著	ケインズなら日本経済をどう再生する（税務経理協会 2003.6）	人文・社会科学系図書室
	中西訓嗣編	国際経済理論（有斐閣 2003.4）	人文・社会科学系図書室
	中村保著	設備投資行動の理論（東洋経済新報社 2003.2）	人文・社会科学系図書室
	藤田誠一編	現代国際金融論（有斐閣 2003.5）	人文・社会科学系図書室
	藤田誠一著	ユーロと国際通貨システム（蒼天社出版 2003.5）	人文・社会科学系図書室
経営学研究科	石井淳蔵著	1からのマーケティング 新版（碩学舎；中央経済社 2003.4）	人文・社会科学系図書室
	岡部孝好著	最新会計学のコア（森山書店 2003.5）	人文・社会科学系図書室
	奥林康司著	入門人的資源管理（中央経済社 2003.5）	人文・社会科学系図書室
	加藤英明著	行動ファイナンス（朝倉書店 2003.4）	人文・社会科学系図書室
	久保英也著	生命保険ダイナミクス（財経詳報社 2003.4）	人文・社会科学系図書室
	古賀智敏著	リスクマネジメントと会計（同文館出版 2003.4）	人文・社会科学系図書室
	桜井久勝著	財務会計講義 第5版（中央経済社 2003.4）	人文・社会科学系図書室
	三矢裕著	アメーバ経営論：ミニ・プロフィットセンターのメカニズムと導入（東洋経済新報社 2003.4）	人文・社会科学系図書室
国際協力研究科	香川孝三・大内伸哉ほか編	グローバリゼーションと労働法の行方（勤草書房 2003.5）	人文・社会科学系図書室
	木村幹著	韓国における「権威主義的」体制の成立（ミネルヴァ書房 2003.6）	人文・社会科学系図書室
医学部	塩沢俊一著	膠原病学（丸善 2003.3）	名谷分室
農学部	佐々木満ほか編	日本の農薬開発（日本農薬学会 2003.1）	自然科学系図書室



フランス大学図書館訪問記 2003.10.26-10.31

矢野真弓 笠原夕美

はじめに

「フランスの大学図書館事情調査」の目的で、神戸大学創立九十周年記念事業による「国際交流・地域交流にかかわる活動の助成」をいただき、2003年10月26日～10月31日の6日間、フランスの幾つかの図書館を訪問する機会を得ました。主に電子的資料、資料の電子化、伝統的図書館と電子図書館の関係について報告いたします。

パリの大学図書館

今回はフランスの中でもパリに集中しての訪問となりました。パリの国立大学は1969年の高等教育基本法によって再編成され、「パリ第1大学」から「パリ第13大学」にわけられました。各大学に名称はあるのですが、正式にはこのように番号で呼ばれています。同じ「パリ」と付いていてもそれぞれの大学は全く別個の組織で、分野ごとに分けられているのが特徴です。また、日本で言うところの「**大学附属図書館」というものがほとんどありません。近い分野の複数大学が、ある図書館を利用するという体制がパリの大学図書館の在り方です。また、国立図書館や公共図書館も分野的に必要と判断されれば、大学図書館と同様に利用できます。

1. ジュシュー大学間共同利用図書館

(la Bibliotheque interuniversitaire scientifique Jussieu)

パリ最初の訪問図書館は、パリにあって比較的「近代的」な大学の在り方をしている、パリ5区のJussieuキャンパスと呼ばれる所にある大学図書館です。名称からも分かるように主に理化学系分野の図書館です。このキャンパスは「パリ第6大学

(Universite Pierre & Marie Curie)」と「パリ第7大学(Universite Denis Diderot)」が共同で使用しています。全くの余談ですが、第6大学は見ての通りキュリー夫妻の名が付いています。その昔ソルボンヌ大学で学び、後に教鞭もとった夫妻にちなんで(現在ソルボンヌと呼ばれる大学には物理分野はないので)付けられているようです。



(Jussieu キャンパス)

パリ名物(?)メトロ10番線のJussieu駅で下車。すぐのところにそびえ立つのがJussieu図書館でした。その外観はとにかく大きく無機質で、お世辞にも美しいとは言いがたいものです。入り口は、キャンパスの大きさからするとあまりに貧相な物で、中にはいると神戸大学と同じようなブック・ディテクション・システムらしきゲートがあり、小さなカウンターがありました。ここでは「1er Cycle Scientifique」図書館の主任司書 Mme.Michele Ollier に案内していただくことになっていましたので尋ねると、奥から手に「歓迎」と書かれた紙を持って走って来てくれました。

ここ Jussieu キャンパス自体は 1968 年に作られたそうです。このキャンパスはパリ第 6、第 7 大学それぞれ 3 万人、合わせて 6 万人の学生が利用するとのこと。14 の専門分野に適応した図書館が存在し、図書館の総面積は 15000 m²、座席数 2500 席、所蔵資料は図書 25 万冊、雑誌 7200 タイトルとのこと。14 の図書館の所属は第 6 大学と第 7 大学に分かれて組織が違う為、コンピュータシステムも違っているなど統一性がとれず、問題点も多いようです。Mme.Ollier のおられる「1er Cycle Scientifique」は、第 6、第 7 大学に所属する 1 回生が利用する図書館なので、自然科学分野の総合的な資料を収集しています。電子ジャーナルについては、フランスの大多数の図書館が参加している Couperin コンソーシアムに加入し、1870 タイトルのフルテキストと 5 つのデータベースを提供しています。2 つの大学から構成される複数の図書館が存在するためプリント版の定期購読を淘汰することが難しく、加えて電子ジャーナルを購入することで費用の負担が多くなり、さらにデジタル資料の購入には 19.6%の消費税が加算されるというフランス独自の問題点もあるということでした。電子資料の提供は、さらに自宅からのアクセス、資料の拡大を求める要望も強いそうです。印刷は、1 人につき年間 60 頁までしかできないようにコンピュータシステムで制限をしているようですが、図書館組織の違いや著作権の面などで、一貫した制限がつけにくい状態だそうです。資料の電子化はしておらず、現在検討中ということです。

次に物理学図書館「Biologie-Recherche」に案内していただきました。ここは博士以上および教官の為の図書館で、座席数 30 席という小さな図書室でしたが、17 万冊の図書、1500 タイトルの電子ジャーナルを提供、独自のホームページも作成し充実した研究ができるように工夫されていました。



(物理学図書館にて。左端が Mme.Ollier)

最後に 2003 年 11 月 12 日に開館予定の数学図書館「Mathematiques-Informatique-Enseignant」に案内していただきました。ここは座席数 500 席で、キャンパス中庭の地下にありながら採光を大きくとった独創的な設計の、夢ひろがる図書館といったイメージです。ID/パスワードの認識無しで利用できるパソコンが設置される予定や、11 の講義室が設けられているのも大学図書館としては珍しい試みとのことでした。



(開館を待つ数学図書館閲覧室)

このジュシュー大学間共同利用図書館は、理化学系分野の図書館であるため、電子ジャーナルやデータベースへの取組も進んでおり、色々な問題をかかえながらも先進的な大学図書館という印象を受けました。

2. ソルボンヌ図書館(Grande Bibliothèque de la Sorbonne)



(宰相リシュリューも眠るソルボンヌ礼拝堂)

ソルボンヌ大学は 13 世紀にソルボンヌ神父がサンジェルマン・デ・プレ教会で学ぶ神学生 13 人の為に学寮を建てたのが始まりで、ルイ 13 世の宰相リシュリューが眠る礼拝堂を中心に大学が建っています。現在ソルボンヌの名を残すのは「パリ第 3 大学 (Universite Sorbonne Nouvelle)」と「パリ第 4 大学 (Universite Paris Sorbonne)」の 2 つで、人文・社会科学分野の大学です。大学内へは身分証明書を各自提示しないと入れず、私達もその場で大学からの案内状を提示するように言われ、厳重なチェックに驚きました。

ソルボンヌ図書館では、Mme. Marina Weill を中心に参考・雑誌担当等の 5 名のスタッフが、シャンデリア輝く美しい会議室で私達を迎えてくださいました。この図書館はパリ第 1・3・4・5・7 大学の 3 回生以上の学生及びフランス全国の修士課程の人等が利用できます。現在の図書館の所蔵資料数は 300 万冊、雑誌 7000 タイトルで、利用登録数は 12000 人だそうです。

電子ジャーナルについては年間約 8000 万円の費用がかかっており、アメリカ等に

よる英語の 2000 タイトルのジャーナルと 250 のフルテキストを提供しています。フランスには 5000 タイトルの電子ジャーナルがあるそうですが、やはり人文・社会科学分野は少ないということでした。

この図書館の創設は 1762 年と歴史が古く、所蔵資料も貴重なものが多いため、貴重な資料の保存という目的での電子化は進めなくてはならない問題であるとのことですが、利用者からはやはり原本の利用を希望する声が強いです。現在は他大学のサーバーを利用しているので、サーバーの導入・最新式のコンピュータの購入、独自のネットサイトの立ち上げ等、多くの費用が必要な上、資料電子化の機器はある会社との共有という状態のため、なかなか進まない様子でした。また今までに電子化し CD に保存したデータがコンピュータ機種を更新により再生できないという問題も発生しているそうです。



(Mme. Weill と会議室で。後ろは礼拝堂)

話をお聞きした後、閲覧室、古書室、書庫などを見学させていただきました。閲覧室は昔のままのものらしく、壁画や絵画に包まれた荘厳なものでした。古書室は研究者にしか開放されておらず、18 世紀以降出版の歴史の資料を利用できるとのことです。閲覧室とは違ってごく普通の現代的なごんまりとした部屋で、パソコン用の接続プ

ラグも設置されています。フランスでは珍しくないとのことでしたが、ここソルボンヌ図書館は「閉架式」図書館で、書庫の様子は神戸大学の人文・社会科学系図書館の様子とよく似た作りだったのが印象的でした。

このソルボンヌ図書館は、費用等の問題もあって資料の電子化や電子ジャーナルの提供は困難な様子で、資料の原本の提供・保存等を優先とする伝統的な大学図書館という印象を受けました。

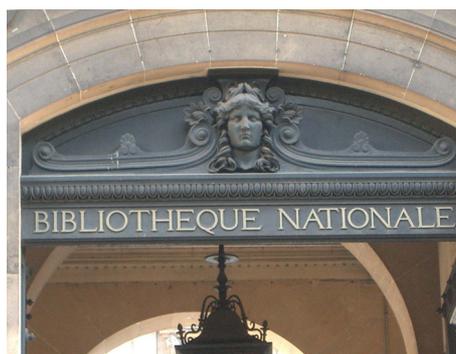
3. 国立美術史研究所 (INHA : Institut national d'histoire de l'art)

国立美術史研究所(以下 INHA)では、資料収集担当の主任司書 Mme.Catherine Brand に案内をしていただきました。INHA はパリ 2 区リシュリュー通りにあったフランス国立図書館がパリ 13 区トルビアックに移転した後に、芸術分野の研究所として 2001 年に設立されました。この建物は 19 世紀の建築家ラブルーストによる設計ですが、広く壮大な閲覧室の壁面に書棚が設けられ、アーチになった天井にむかって一面に壁画が描かれており、そのすばらしさに深く感動しました。この建物には、フランス国立図書館の専門部門(版画・貨幣・メダル等)、古文書学校附属図書館と INHA の 3 館が共存しており、入口にはそれぞれの案内所があり、閲覧カウンターも隣り合って置かれていました。



(INHA のある旧フランス国立図書館入口)

INHA はパリ第 4 大学と第 1 大学の専門図書館としても利用されており、2 つの分野から成り立っています。1 つは研究教育分野で、研究所長(1 名)・審査委員(4 名)・研究員(16 名)・他国の研究者に加え、大学院博士・学芸員を目指す学生等によって活動が開始したところだということでした。もう 1 つは図書館分野で、4 つの図書館が統合されるそうです。その中の「Jacque Doucet 美術考古学図書館」「古文書学校附属図書館」はすでに 80 万部の資料と共に移転しており、2004 年にはルーブル美術館の「国立美術博物館中央図書館」(資料約 10 万部)、その後「国立高等美術学校図書館」(資料約 25 万部)の移転が予定され、2008 年には「ラブルースト館」として 130 万部の閲覧が可能になる予定です。年間購入部数は、一般書 1 万部、専門雑誌 1600 部。



(フランス国立図書館の表示が残る入口上部)

案内していただいた Mme.Brand は重要資料の欠本を補充する仕事をされています。INHA 図書館の前衛、Jacque Doucet 図書館は財団所有だったので 19-20 世紀のコレクションは充実しているそうですが、資料を購入できない時代があり、その不足箇所を完全なものとし、利用者へ提供する事を第 1 の目標とされていました。2000 年から始め、全部で 3 万部の購入を予定しておられ、収集は研究者との協力の元に行っているとのこと。新しい図書館としての活動の最中ということもあり、新しい在り方として 130 万部中の 26 万 5 千部の図書を開架にするという、フランスでは珍しい規模での開架図書館を目指すことや、視聴覚資料を

増やすこと、古書・貴重書、美術史上重要な物（18-19世紀の版画、写真など）の電子化計画など、とても意欲に燃えていらっしゃいました。

4館の共通カタログは来年1月までに公開予定だそうです。美術工学分野の電子ジャーナルは遅れているという理由もあり、電子ジャーナルの提供はできていませんが、INHAは、2008年の全面開館に向かって資料の充実、多くのパソコンの配置、電子化資料・電子ジャーナル等を提供いくという、大きな計画を持って動き出していました。

4. 新フランス国立図書館

(BNF: *Bibliothèque nationale de France*)

新フランス国立図書館（以下BNF）では、文学美術部門で日本書担当のMme. Josiane Destouetに、日本語で案内をしていただきました。

BNFはミッテラン大統領によって大規模な新式の図書館として計画、パリ13区のトルピアックの地に建設され、1996年に一般用閲覧室、1998年に研究用閲覧室が開館しました。研究用閲覧室の開館当初は、コンピュータの不具合や職員側のトラブル等によって一ヶ月以上の閉館に追い込まれたようですが、私達の訪問時にはスムーズに運営されているようでした。広々とした中庭を囲んで四隅に20階建ての建物が、本を開いた様子をイメージしてL字形に建つ巨大で近代的な図書館です。



(新フランス国立図書館外観。北側)

入り口では空港さながらの厳重な持ち物

検査を受けました。閲覧室は一般用と研究用に分かれており、一般用には座席数約1500席・開架図書38万冊、研究用には座席数約2000席・開架図書48万冊が用意されています。一般用は分野別の10の閲覧室があり自由席ですが、研究用は予約制になっていて利用する図書も座席からコンピュータで取り寄せ、未返却の場合は出口でチェックがかかり退館できない等、すべてコンピュータで管理されているそうです。総蔵書数は1000万冊、雑誌35万タイトルの大規模を誇ります。

地下にある、図書の配送システムの様子も見せていただきました。丸いゴンドラ風の鉄製の箱が天上を這うレールに沿っていくつも移動している様はまるで工場です。

BNFの大きな特徴としてあるのが電子図書館Gallicaです。現在は10万点の電子資料に加え、辞書・百科事典・定期刊行物が提供されています。資料の電子化は19世紀のフランスの著作を対象としており、有名な哲学、文学的資料を優先的に、将来的には20万点を電子化していく予定だそうです。さらにフランスを中心としたヨーロッパの企業データベースの閲覧権利をとっており図書館内からの検索が自由にできるそうで、Gallicaは膨大な資料に利用者が迅速にたどりつくことができる電子図書館となっています。

電子化の問題点として、貴重本を写真や画像にすることや現物を守る作業が困難で、電子化のスタッフは25名いますが、まだまだ時間と人が必要だということでした。これからも電子化を進める計画ですが、20世紀以降の資料は著作権の関係上、実現には時間がかかりそうです。

問題点を抱えながらも、最新技術を生かしたBNFは、近代的建物とともに電子図書館として目覚ましい進展を見せていました。



(Mme. Destouet。隣はBNFの模型)

おわりに

フランスの歴史ある伝統的な図書館と、大規模で先進的な図書館を同時に視察できたことは、私達にとってすばらしい貴重な経験となりました。フランスの大学図書館は、電子化と言う点では日本と大差がないというのが素直な感想ですが、各図書館の司書の方々の意欲、誇りは大いに学ぶべき点が多いと実感しました。これらの機会を与えていただいた事に深く感謝し、お世話になりました多くの方々に心よりお礼申し上げます。

(やの まゆみ 雑誌掛)

(かさはら ゆみ 医学系情報サービス掛)

<関連 URL>

ジュシュー大学間共同利用図書館

<http://www.bius.jussieu.fr/>

・物理学図書館(Biologie-Recherche)

<http://bibliotheque.snv.jussieu.fr/>

ソルボンヌ図書館

http://www.paris4.sorbonne.fr/rubrique.php3?id_rubrique=1134

<http://www.sorbonne.fr/Websorbon/Arborescence/5-Etablissements/BIU.html>

国立美術史研究所 (INHA)

<http://www.inha.fr/>

新フランス国立図書館(BNF)

<http://www.bnf.fr/>

・Gallica

<http://gallica.bnf.fr/>



国立国会図書館関西館見学記

鳥谷 和世

去る 9 月 24 日、兵庫県大学図書館協議会研究会として、国立国会図書館関西館を見学する機会がありました。その折の感想など、以下に簡単にまとめてみました。

【関西館まで】

関西文化学術研究都市内と聞いた印象通り、関西館はとてものどかなところにありました。遠隔利用をサービスの筆頭に掲げ、電子図書館事業を基本機能の 1 つにする関西館ですから立地は気にする必要はないのかもしれませんが。神戸市内から片道ほぼ 3 時間の道中を、私は JR を利用して大阪市内を抜けていきました。車窓の景色が立派な田園風景に変わる頃には、車中もローカル列車の雰囲気です。ちょっとした小旅行の気分です。少なくなった乗客の大半を占めていた、おそらく同志社の学生がばたばたと下車してまだ数駅、ようやく到着した祝園駅からバスで約 10 分、雨に煙る関西館は水と緑にあふれた建物でした。

【関西館入館】

地下、地上各 4 層の関西館は、傘の下から見上げたせいか、ガラスキューブを積み上げたような外観のためか、前にしてもあまり高さを感じません。水の流れる庭を少し歩いて中に入ると、わりとこぢんまりとした細長いエントランスホール、階段を降りて地下 1 階が総合閲覧室とアジア情報室です。書庫も地下 2 階以下に設置され図書館の本体は地下に根を張るイメージです。地階にあるといえ、閲覧室は自然光による採光を行い、二重になったガラス壁の向こうは緑あふれる中庭、これは関西館建設のため伐採された植生を復元したものとか、そのほか最下層まで吹き抜けのアトリウムや屋上庭園など、外界との距離感をできるかぎり薄く、内部はあくまでも快適に保たれた関西館は、いずれこの建物自体も造られた時の雰囲気を伝える資料になるのだろうか、などと写真でしか知らない東京本館を思い浮かべて考えてしまいました。

【施設見学】

雨にも関わらず閲覧室には利用者の姿がかなりあり、これには正直驚きました。参考図書を中心に一部の資料は閲覧室に開架されていますが、書庫内の資料を閲覧したい場合は設置端末から請求すればよく、資料の到着と受取場所は案内ディスプレイで確認可能とのこと、まるで病院の外来カウンターのようです。一方、書庫内では、天井付近を、資料を載せたカートが走ってゆく様を見学することができました。また自動書庫に保存されている資料については、請求の都度、収納ボックス単位に自動的に搬出・格納が行われます。これは他種の図書館ではなかなか見ることのできない光景ではないでしょうか。

【終わりに】

やはり実際に訪れてみると物理的なキャパシティを目の当たりにするためか、バーチャルなサービスさえ量的なイメージで想像できる気がします。情報を咀嚼するのは結局利用者一人一人なので、電子情報も含め今後蓄積される膨大な情報をいかに提供していくかはとても大きなテーマなのだ改めて実感しました。既に様々な電子図書館コンテンツを展開している関西館ですが、利用者の情報ニーズに今後どう応えていくのか、また学術情報流通システムのいわば要である国立情報学研究所との関係はどうなるのか、大学図書館にあって私もこれからは一層関西館に注目していきたいと考えています。

(とや かずよ 目録情報掛)

国立国会図書館関西館 <http://www.ndl.go.jp/jp/service/kansai/index.html>

図書館からのお知らせ

文献検索システムWeb of Science導入

Science Citation Index (SCI)をもとに6000タイトル以上の自然科学系雑誌の1996年以降の論文の書誌データが検索できます。7割以上の論文にはアブストラクト(抄録)が付いています。このデータベースの特徴としては引用文献検索があげられます。これによりある特定の論文がどれくらい引用されたかが分かります。電子ジャーナルへのリンクもERLシステムにおける雑誌単位へのリンクと異なり論文への直接のリンクとなっていて、非常に便利になりました。神戸大学図書館の雑誌所蔵情報へのリンクも付ける予定です。

なお、社会科学系、人文科学系のSocial Sciences Citation Index (SSCI), Arts & Humanities Citation Index(AHCI)については残念ながら今回は導入が見送られました。

Web of Scienceは学内の端末からWeb ブラウザーを使ってID, Password無しで自由に利用できます。同時接続数は5となっていますので、検索終了時には他のユーザのために必ずLog outしてください。

(Web of Science のURL <http://isiknowledge.com>)

(情報リテラシー掛)

国際・教養系図書室に最新刊の一般教育用図書を大幅拡充

国際・教養系図書室に、新刊図書約3000冊が配架されました。

これは、1, 2年生の学生が多く利用する国際・教養系図書室に、一般教育用図書を充実させるための経費として、平成15年度学長裁量経費の配分を受けたことに基づくものです。新しく配架された図書はイラク問題・北朝鮮問題をはじめとした国際関係の最新刊も含め、全分野に渡るものとなっていますが、特に自然科学系分野の充実を図るようにしました。

今回の特徴の一つに、新しい図書からブックカバーを取り外さなかったことがあげられます。意匠を凝らしたカバーが付いた新刊と、図書館の書架で裸にされた本とのギャップが利用者からも不評でしたが、今回は約3000冊の本全てのカバーを付け、その上からフィルム・コーティングをしています。

図書は、開架図書室に配架されていますので、学生の皆さん、大いに利用してください。

(国際教養系情報サービス掛)

人文・社会科学系図書館、医学部分館に 図書自動貸出返却装置設置

3月に人文・社会科学系図書館、医学部分館に図書自動貸出返却装置が設置されることとなりました。4月から利用できます。これにより、利用者自身で貸出処理ができますので、医学部分館では開館時間中の他「特別利用」の時間帯(21:00から翌朝9:00)にも資料の貸出が可能となります。但し、利用可能な資料は、表紙にIDコードラベルのあるもののみです。なお、従来通り、貸出処理を忘れて退出しようとした場合は、ブック・ディテクション・システムによってブザーが鳴り、ゲートがロックされますので、ご注意ください。

(情報サービス課)



附属図書館日誌（2003年10月～12月）

- 10.3 国立情報学研究所大学図書館等関連事業説明会（京都市）
- 10.10 中国政府からの書籍寄贈贈呈式
- 10.16 附属図書館長・副館長・分館長懇談会
- 10.20～31 デジタル・アーカイブ・ガイダンス（自然科学系図書館）
- 10.24 兵庫県大学図書館協議会研究会（関西学院大学）
- 10.30 平成15年度第3回国立大学図書館協議会理事会（名古屋大学）
- 11.10～21 総合目録データベース実務研修（国立情報学研究所）
- 11.11 Web of Science講習会（学術情報基盤センター分館ほか）
- 11.11～14 西洋社会科学古典資料講習会（一橋大学）
- 11.26 近畿地区国立大学図書館協議会事務局課長会議（京都大学）
- 11.27 第3回附属図書館運営委員会
- 11.28 兵庫県大学図書館協議会講演会（学園都市ユニティ）
- 12.2 電子ジャーナルの取扱いに関する担当者会議（国立情報学研究所）
- 12.5 国立情報学研究所公開講演会（京都市）
- 12.8～9 第16回国立大学図書館協議会シンポジウム（西地区：瀧川会館）
- 12.10 古典資料のデジタル化と保存・修復に関するシンポジウム（近畿大学）
- 12.16 電子ジャーナル等検討委員会
- 12.19 GIFと画像伝送システムの活用研修会（京都大学）
- 12.24 附属図書館長・副館長・分館長懇談会
- 12.25 第4回附属図書館運営委員会

【編集後記】新年を迎えました。4月の独立行政法人化を前に、大学の中での附属図書館の役割が改めて問われています。図書館では、皆様の学習・研究に役立つ情報をより早く、より多くの方にお知らせするために、この図書館報を含めた広報体制の在り方についても検討を始めました。今後の変化にどうぞご期待ください。

神戸大学附属図書館報Vol.13 No.4（通巻第52号）2004（平成16）年1月1日発行

【編集・発行】神戸大学附属図書館 神戸市灘区六甲台町2-1（〒657-8501）電話(078)881-1212（代）